

次代を拓く

「株式会社テクノサイエンス」

国内はもちろん、世界にも通じる静岡県の「ものづくり」。

新技術や新分野への挑戦によって、世界での活躍が期待される県内企業は後を絶たない。

今号は人工呼吸器を扱う医療現場の声をすくい上げ「カフスカッツ」を開発、

世界のスタンダードを目指す沼津市の企業「株式会社テクノサイエンス」を紹介する。

得意分野を活かして医療の世界へ新規参入

静岡から世界のスタンダードへ

静岡県が推進するファルマバレープロジェクト(富士山麓先端健康産業集積プロジェクト)の後押しを受けて世界へ飛翔しようとする企業がある。沼津市の(株)テクノサイエンスだ。

同社の創立は昭和63年。赤外線や可視光などの計測器を大手メーカーなどにOEM供給する企業として誕生した。その後、人材派遣や

通訳などを行う部門を設立して事業を多角化する一方、自社ブランドの立ち上げを目指し、平成21年に医療分野への進出を決意する。

医療機器の開発に着手した同社は、早速ファルマバレープロジェクトの推進機関であるファルマバレーセンターの扉を叩き、そのネットワークを介して医療現場の声をすくい上げた。そして富士宮市立病院の臨床工学士の意見をもとに「気管内チューブカフインフ

レーター」の開発に乗り出す。

人工呼吸器の気管チューブにはカフと呼ばれる風船状のパーツがある。その圧力を一定に保てばVAP(人工呼吸器関連肺炎)や気道粘膜損傷のリスクを軽減できる可能性がある一方、看護師が約2時間おきに圧力をチェックしなければならぬなど、医療現場の負担になっていた。そこで同社はカフの圧力を適正に管理できる装置を開発。圧力が乱れた際のアラーム機能も

搭載して「カフスカッツ」と名付けた。同社の代表取締役・日吉晴久さんは「自社に測定器のノウハウがあったので開発自体は順調でしたが、医療現場のさまざまな意見を集約するのは大変でした」と当時を振り返る。

現在、「カフスカッツ」は特許を取得し、全国の病院で使われている。「普及率はまだまだですが、将来は世界のスタンダードになればと期待しています」と日吉さん。翻訳

や通訳も手がける同社の強みがある。でも活かされている。

同社は「カフスカッツ」に改良を加えながら、新しい製品開発にも積極的に取り組む。「早期発見、早期治療を促す製品を試作中です。キーワードは誰でも簡単に。これからも自社の技術、ノウハウ、人材を活かしながら、ファルマバレープロジェクトと連携して医療の分野で貢献していきたい」と日吉さん。その視線はすでに世界をとらえている。



気管チューブの先端にあるカフ。この内気圧を一定に保つため、従来は看護師が2時間おきにチェックをしていた。



カフスカッツをチェックする開発チーム。



人工呼吸器に用いる気管内チューブカフインフレーター「カフスカッツ」の使用例。



仕事に対するバイタリティと柔軟な発想力で医療分野へ参入を成功させた(株)テクノサイエンス代表取締役の日吉晴久さん。

Company Data

株式会社テクノサイエンス

静岡県沼津市一本松128-2

電話: 055-966-6000

http://www.t-science.co.jp/